



御蔵島の 宝物 黄楊と桑

ツゲ

クロ

都心の南約200kmの海で、
海底1500mから立ち上がり、
周囲約16kmという小さな陸地で
人々が守りつづけた島の宝を巡る。

雨と濃霧が育む 島の森

黒潮のただ中に浮かぶ

御蔵島の外周は、わずか16.4km。

海岸線は、強い潮の流れと偏西風に煽られた波に

浸食された断崖が取り囲んでいます。

暖流の湿気を帯びた空気が

海風と共に切り立った崖を駆け上ると

急激に冷やされ、

雨や濃霧となって山上に鬱蒼とした

照葉樹の森をつくり出しました。

スダジイ、タブノキ、ホルトノキ、黄楊、桑などが繁茂し、

島の人々が「神山」と呼んで崇めた森には、

幹回りが7mを越す大木が点在しています。

耕作できる平地がほとんどない島に暮らす人々にとって、

樹木は燃料や道具として使うだけでなく、

炭や薪などの交易品として

生活に欠かせない資源でした。

中でも、黄楊と桑は、目が詰まっっていて硬く、粘りがあり、

緻密な細工を施す指物などの世界で最高級素材として扱われてきた、

特別な存在なのです。

黄楊

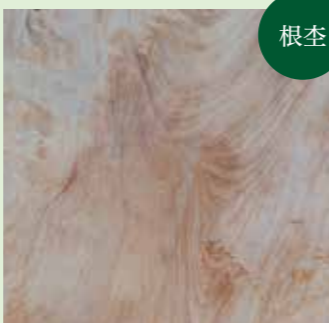
TSUGE



風の影響で枝や幹をくねらせる天然の黄楊。風の影響が少ない場所で植林したものはまっすぐ生長する。

厳しい自然環境が創る 杢目の芸術

島に吹きつける強風に晒されながら、硬さと粘りを作り、誕生した黄楊細工の最高級素材。



根杢

年輪が複雑に入り組む根元の部分から取れ、切る場所によって多彩な模様生まれる。



孔雀杢

孔雀の羽根模様を思わせる杢目で、木が二股に分かれる部分から取れる。



虎杢

繊維方向と直角に交差するように、虎の縞模様が現れる光沢を帯びた杢目。



直径10.5cmの黄楊の小口。樹齢は約50年で、木材として使われるには最低限の樹齢に属する。いかに生長に長い時間がかかるかがうかがえる。

黄楊

TSUGE PRODUCTS



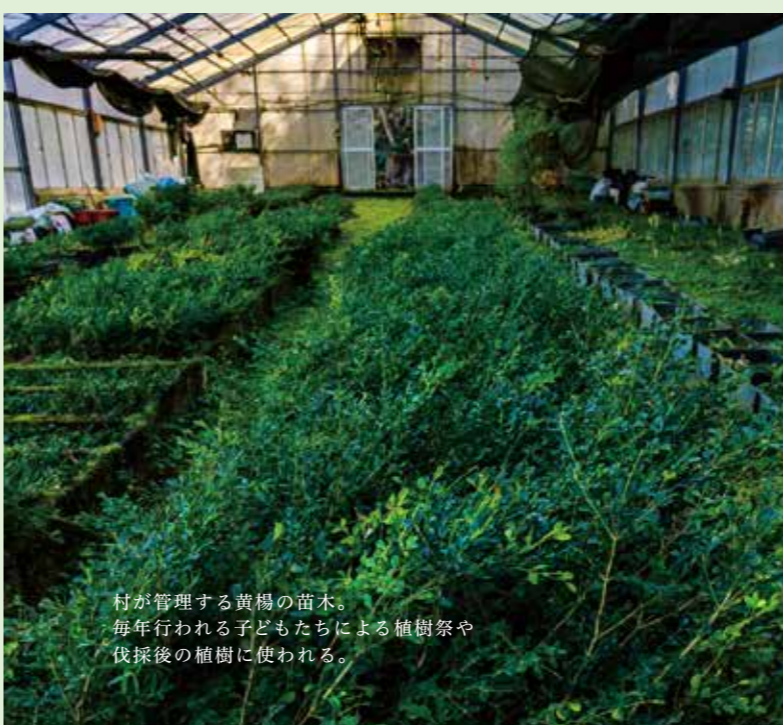
将棋駒の産地、山形県の天童で作られた「虎杢」の駒。独特の縞模様が風格を漂わせる。

小さな面に文字を緻密に彫る必要がある印鑑にも、黄楊が多く使われる。



黄楊材の性質を生かして作られた細い歯の櫛は、江戸時代の女性の身だしなみに欠かせなかった。

海拔500mを超えた山の上層部に残る黄楊の自然林は、山肌を駆け抜ける強風を受けて、背を低くしたまま幹や枝をくねらせています。こうした厳しい自然環境で育った御蔵島の黄楊は、樹齢が50年を超えても両掌で覆ってしまうくらいに太さには生長しません。黄楊は、非常に硬いため、古くから繊細な加工が必要とされる櫛や印鑑、算盤球などの原料として使われてきました。特に、御蔵島の黄楊は、繊維分の密度が非常に緻密で、透明感のある色艶が出ることから「島黄楊」と呼ばれ、最高級素材として扱われてきました。将棋駒を作る職人の世界では、幹や根っこ、枝分かれする部分などの部位によって、「孔雀杢」「根杢」などと呼ばれるさまざまな模様が取れ、その美しさを競い合いました。中でも虎のような縞模様が浮かび上がる「虎杢」は100本に1本しか取れないといわれる貴重な材で、独特の美しさがあり、高値で取引されています。そのため、島では、子どもが生まれると山に黄楊を植え、大切に育てる習慣があったといえます。



村が管理する黄楊の苗木。毎年行われる子どもたちによる植樹祭や伐採後の植樹に使われる。



目が詰まっているため、細くても重い。運搬用モノレールを使って搬出される。

桑

KUWA



急斜面に根を張る桑の大木。
植物学上は「ハチジョウクワ」に分類されるが、通称「島桑」と呼ばれる。

島の木が集まる 一大集積拠点

島で切り出される
黄楊と桑の多くが集められる
「御蔵島村産業センター」

黄楊や桑は、生長する力が弱まる秋から冬にかけて伐採され、その多くが「御蔵島村産業センター」に集約されます。そして、傷んだり歪んだりしないよう、大型の乾燥機に約4日間入れ、更に倉庫で半年間寝かせて乾燥させます。こうしてできた木材は、センターでオリジナルの製品に加工されたり、素材として全国の製造業者へ販売されたりしています。

センターは、例年2〜3tの原木を入荷しており、販売が開始される11月のうちに全て売り切れとなります。職人や材木店から黄楊を買い求めたいという声はありますが、人口300人余りの島で次世代の林業の担い手を育てることは容易ではありません。10年後、20年後、そして100年後も黄楊が島の誇りとして受け継がれるために、時代にあった林業のあり方が模索されています。



乾燥した黄楊材が並ぶ倉庫。価格は杓目や状態によってキロ単位で細かく決まっており、数千円から数万円まで幅がある。



約800kgの原木を入れることができる乾燥機。時間と温度、真空度のバランスを調整しながら効率的に水分を取り除く。



窓の外に三宅島が見える作業室。ここで、島オリジナルの黄楊や桑の製品が作られる。



ボールペン。小さいながら、ダイナミックな杓目と暖かい色味が独特の存在感を生んでいる。

島の桑を使って作られた将棋の駒箱。燃え上がるような杓目が経年によって黄金色を帯びている。



製材された桑板。この状態でも黄色味がかっているが、経年で木が含む油によって独特の黄金色を浮かび上がらせてくる。江戸指物では、鏡台や文庫、引き出し箱などによく使われる。



硬くて粘りのある材質は、小さいものをつまむ箸にも最適。



時を重ねて 浮かび上がる 黄金の艶

美しい杓目と色に加え、微細な加工に耐える品質と腐りにくさを兼ね備えた、黄楊にも劣らない優秀な木材。

御蔵島の桑は、急峻な土地で育つためか年輪が密で硬く、何よりも使い込むほどに深みのある黄金色に変わっていく美しい杓目特徴です。黄楊よりも生長が速く、江戸の武家や商人、歌舞伎役者たちに愛された江戸指物の高級材として多くの職人に使われ、「金桑」「黄金桑」と呼ばれていました。明治時代には、島の桑を使って傑作を生み出す木匠家を「桑樹匠」と称したことから、その品質の高さをうかがうことができます。

また、伐採した木の樹皮が傷んでしまうような悪条件下でも、中の材はきれいな状態を保っていることが多く、細かい加工に耐えうる品質と扱いやすさが両立できている優れた木材として、再び注目を集めはじめています。

ふたりの匠が語る 島黄楊と島桑の魅力



駒工房 稚山
高橋稚山さん

修行時代を入れると45年近く島黄楊を使っています。刃がスツと入るし、いい色合いに仕上がります。一度、伐採の現場に入り、本当に厳しい環境で育っているのを知っているのが、大切に思っています。



吉田碁盤店三代目主人
吉田寅義さん

御蔵島の桑は、硬さが均一で、切っただけでカンナをかけたような艶が出ます。将棋の駒台によく使いますが、特徴のある杓の部分を使うことで、他の桑材では出せない美しさと風格がうまれます。



黄楊が米に変わった 島の歴史

島の生活を支える、
かけがえのない資産だった黄楊木。

島に暮らす人間の歴史は、古くは住居跡が残る縄文時代まで遡ることができます。しかし、まとまった人数が暮らしたことが分かってきているのは、江戸時代以降のことです。物産に乏しい御蔵島において、当時の生活を支えた島の特産品は、黄楊でした。年に2回行われた黄楊材の搬出は、島をあげての大仕事でした。男性が切り出し、女性が運搬を担当しましたが、目の詰まった重い原木を港まで運ぶ役目は想像を絶する辛さだったといえます。そして、黄楊材は江戸で売られ、その代金で米や日用品を購入し、人々に分配されていました。

近年、島はイルカウォッチングで賑わうようになりましたが、山に入れば、今も黄楊の森に出合うことができます。多くのコースが自然保護のためにガイドを依頼する必要がありますが、島の自然と歴史に耳を傾けながら、生きる糧を担ってきた島の宝の魅力に触れてみてはいかがでしょうか。



今も山に入る前に島の人が葉っぱをお供えして安全祈願する「草祀りの神様」



島の自然や風習に詳しい、島出身のガイドさん



鬱蒼とした自然林に囲まれた御代ヶ池



東京宝島
TOKYO
TREASURE ISLANDS

「御蔵島の宝物 黄楊と桑」

御蔵島村役場

〒100-1301 東京都御蔵島村字入かねが沢

TEL：04994-8-2121 (代表)

掲載されている情報は、令和3年3月時点のものです。

